

- 1、厳しい農業労働を終え、収穫を感謝して、年1回エルサレムの神殿に都もうでをした、信仰厚い詩人の心が、この詩には滲んでいる。「雨も降り」(7)は秋の収穫の後のこと。「嘆きの谷」(字義は「バーカーの谷」)。場所は分からないが、エルサレムに行くまでの荒れはてた谷。比喩的には、広く人生の苦しい経験が暗示されている。「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです」(11)は、詩人の神殿での高揚と日常生活とのリズムが意識されている。
- 2、注目したいのは、「あなたの祭壇に、鳥は住みかを作り、燕は巢をかけて、雛をおいています。万軍の主、わたしの王、わたしの神よ。」(4)。祭壇に小鳥の巣とは、神殿の荒廃だ、と解釈する学者もいる。が詩の全体からは無理な解釈。言葉は、直接的意味と、象徴的な使い方とがある。ここは象徴言語、比喩である。巡礼者は遠いところから、一年の労働とその収穫を終えて、今晴れやかに、それぞれの捧物を携えて来た農民である。ハレとケ、祭りと労働、解放と束縛のけじめを大事にする。民族学的な感覚では、ハレでの巡礼である。神殿のどこかに鳥が住み燕が巢をかけていることは、自分達の人生の「育み」の営みが持っている命の全体が暗示されている。「神殿」に巣を作って住み、子を育むという比喩のスケールは大きい。信仰者は、世俗に生きるが、帰ってくる礼拝の場所を持つ。そこで祈る。その全体が一つに捉えられている。
- 3、「雛を置いている」(4)という言葉は、自分が、子供を育てている事の恵みを暗示している。さらに自分も神に育てられているという信仰が意味されている。「育てる」という苦労は、「育てられている」という自分を自覚させる。関係というものは、相手の立場になってみて始めて分かるものだ。結婚式に親と子の時の二重性を感じる。「親の恩、子知らず」「子を持って知る。親の恩」という諺である。「育み」という事と、「育む」という事と、「育まれる」という事は、一つの事柄を意味している。全体が一つの神の恵みの内にある。
- 4、この詩には辛くて重い日常がよくでてくる。「勇気をだして心に広い道を見る」(6)。勇気をださなければ越えられない道がある。「祈りを聞いてください」(9)という。そこには現実の苦しさがあ。しかし、詩全体は、それを突き破って進んでいく、希望や喜びに満ちいる。「いかに幸いなことでしょうか」というリフレイン、繰り返しが3回も出てきて、自らを確かめている。「主は、与えよいものを拒もうとはなさいません」(12)。この言葉に、励まされて、子育てをし、家族を育て、そして、それを包み育ぐぐむ教会を、神の宮を、守っていこうではありませんか。
- 5。10年も前に観た、映画「千と千尋の神隠し」のことが思い出される。宮崎駿(はやお)さんの「育てる」という思想のスケールは大きい。